

「いのちの糧」

列王記第一 17 章 8～16 節、ローマ人への手紙 14 章 10～23 節

姫路あけぼの教会牧師 廣田守男

「イスラエルの神、【主】が、こう仰せられるからです。『【主】が地の上に雨を降らせる日までは、そのかめの粉は尽きず、そのつぼの油はなくなる。』」(14)

「なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。」(17)

◎私達が切羽詰まった状況に直面するとき、すべてのことを理解し、必要を備えて下さる御方がおられるのです。

◎列王記第一 17 章には預言者エリヤ（「私の神はヤハウエ」の意）の働きが記されています。①生ける神様。「私の仕えている神、主は生きておられる。」(1)。キリスト教会は主イエス様に対し「あなたは、生ける神の御子キリストです」と告白する群れです（マタイ 16: 16）。②養ってくださる神様。神様はイスラエルの国を干ばつ（露も雨も降らない）状態に置かれました。その間、ケリテ川のほとりに住んでいた預言者エリヤをカラスに命じて養われたのです(4,6)。更に川の水がかれた時、一人のやもめの所に導かれたのです。息子と最後の食事をしようとしていた彼女に、エリヤをもてなすことによって「主が地の上に雨を降らせる日までは、そのかめの粉は尽きず、つぼの油はなくなる」と約束され(14)、奇跡が起こったのです(16)。神様は「神の国とその義とを求める」者に必要なものを与えてくださり（マタイ 6:33）、「聖徒たちに仕え、神の御名のために示した愛をお忘れにならない」御方なのです（ヘブル 6:10）。③顧みてくださる神様。しかし、その家庭にも大切な息子が病気になり、息を引きとる悲劇が起こったのです(17)。彼女は、その悲痛の余り「神の人よ。あなたは私の罪を思い知らせ、私の息子を死なせるために来られたのですか」とエリヤに詰め寄ります。人間は困難な状況に遭遇するとき、自分を責め、また人を咎める傾向があります。特に人との関係が絶たれてしまったときの悲痛は言語を絶します。しかしエリヤは「あなたの息子を私によこしなさい」と語りかけ、そして神様に祈った所、その息子は生き返り、母親に渡されたのです(23)。母親は「主の言葉は真実である」と神様を崇めました(24)。かつて主イエス様もナインの町で、一人息子を葬るやもめの行列に接し「母親をみて、かわいそうに思い『泣かなくても良い』と言われ、棺に手をかけ『青年よ、起きなさい』と言われ」母親に返されたのです（ルカ 7:12, 14）。確かに神様は「顧みてくださる」御方です（同 16）。神様との関係、人との関係がどんなに絶たれていても回復させて下さる御方を崇め、信頼しましょう。

◎ローマ人への手紙 14 章の主題は「信仰者相互の対人関係」で、キリスト者同志で

意見の異なる問題に対する正しい態度について論じられているのです。パウロは訪れたことのないローマ教会に対して、起こるであろう具体的な問題、特に人間関係を取り上げております。これはすべての教会において起こりうる問題なのです。この14章では信仰の強弱の問題が取り扱われております（今までは信仰の有無の問題が問われていた）。「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見を裁いてはいけません。」(1)とあり、更に「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さを担うべきです。自分を喜ばせるべきではありません。」(15:1)とあります。コリント人への手紙第一8章にも取り上げられております。

◎信仰の「弱い人」と「強い人」の違いは分かるのでしょうか。一口に言えば、これまでの生き方や社会通念に拘っている人とそこから解放されて自由に振る舞っている人と言えるのではないのでしょうか。特にこの箇所では「食べ物の問題」(2)及び「日の問題」(5)が取り上げられています。どちらも「主のために」行っていることであり、「神がその人を受け入れてくださっている」からなのです。しかし行い方、守り方に違いがあるのですが、人は他の人のしていることが気に掛かり、つい「裁きたくなる」のです。私たちは自分を喜ばせることを求めるよりを他の人を喜ばせることを求め、特に「主イエス様」が何を求め、願っておられるのか、を聞き続けて歩みたいものです。食べる人も食べない人も日を守る人も守れない人も、「確信を持ち」、「主のために」行い、いつも「神に感謝をささげる」歩みをさせて頂きたい。私たちは「主のために生き、主のために死ぬ」身なのです。